



科学館は遊びの場ではなく、学びの場

名古屋市科学館の新館が3月19日にオープンしました。スケールアップし本物に近い宇宙を体験できるプラネタリウムや、驚きや感動のある展示など、従来以上に科学への興味を喚起する展示がたくさんあります。例えば、実際に竜巻を起こし、それに触れることができる装置や、マイナス30度の環境を作りオーロラ映像を観察する設備もそうです。それらが「不思議だな」「なぜだろう」と考えるきっかけになれば、と願っています。

これまでと変わらない基本理念もあります。名古屋市の科学館は遊びの場ではなく、学びの場だということです。日本には100以上のプラネタリウムがあります。中には娯楽性を重視したものもありますが、名古屋市科学館は、あくまで天体とは何か、宇宙とはどういうものかという科学的な知識を大切にした上映を行っています。考える楽しさ、解決する喜びを通して、将来、科学の知識を活かし、モノづくりに励んでくれる子どもたちを育てたい。それが使命だと考えています。

目につく親の「理科離れ」

科学館の館長をお引き受けしたのは、平成19年です。私は発明協会の愛知県支部長をしておりまして、少年少女発明クラブの育成にも力を入れてきました。もともと企業の人間ですが、大学にもご縁があり、産学連携にも力を入れています。そういうこともあって、私に白羽の矢が立ったのかなと思っています。

今の子どもは落ち着きが無いですね。スイッチを押してすぐ反応しないと次の展示へ移動して

科学の知識を活かし
将来モノづくりに励む
子どもたちを育てたい



名古屋市科学館 館長
石丸典生さん

いしまる つねを／昭和3年生まれ。東京大学工学部卒業。デンソー(旧日本電装)社長、会長等を経て現在特別顧問。中部エレクトロニクス振興会理事長、発明協会理事。H19より名古屋市科学館館長。藍綬褒章、旭日重光章などを受章。



名古屋市科学館新館の全景パース

しまう。5秒、10秒を待てない。それを待てるようになる教育も必要ですが、われわれの仕事はそういう現実に対応できるよう展示を改良していくこと。新館はそうなっています。

もう一つ痛感するのは、子どもは科学好きで展示に興味を持ちますが、親に問題があるように思います。ベンチに座ったまま動かない。子どもの理科離れがいわれますが、実際は親の理科離れじゃないでしょうか。親がいっしょに楽しめば、子どもはもっと科学が好きになるはずです。新館は親も興味を持てるよう工夫しています。家族みんなで楽しんでほしいのですね。

日本のモノづくり文化の特徴は「勤勉さ」

私はずっとモノづくりの世界で生きてきました。海外の現場もいろいろ見てきました。それで感じるのは、日本人は与えられた仕事に、実に積極的に取り組むということです。日本のモノづくり文化の一番の特徴は「勤勉さ」ではないでしょうか。

アイデアも大事ですが、それには基礎知識が必要です。基礎知識を身につけるには、まじめに勉強しなければいけません。アイデアや独創力にも下地に勤勉さが必要です。日本人にはそれがあります。ただ視野は狭いかな(笑)。論理性ではドイツ人にならないと思います。でも勤勉さでは、どの国にも負けません。それが日本の戦後復興と繁栄を実現しました。今後も失ってはいけない文化だと思います。

私のお気に入りの場所

瑞穂区「瑞穂公園」

地下鉄の駅名でもある「運動場」という名前に馴染みがあります。陸上、ラグビー、野球、弓道などの運動施設が揃っています。旧陸上競技場の高さ42メートルのマラソン塔はランドマークでした。残念ながら全国インターハイ(1983年)のための改築で姿を消しました。今はここをホームスタジアムとするグランパスエイトのナイター照明が夜空に映えています。名古屋はもとより近県のアスリートの憧れの地であり、一方で公園内を貫流する山崎川(親水性を高めた改修がなされた)とともに市民の憩いの場となっております。

中部大学工学部都市建設工学科教授
磯部友彦さん

